

## オオタカ保護指針策定調査の結果について －調査手法の改善－

### 1 背景

環境省では、「猛禽類保護の進め方（特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて）」（平成8年）において、開発事業地等におけるオオタカの生態調査については、定められた地点から目視によりオオタカを追跡する行動圏の調査方法（定点調査）を示している。

定点調査の実施のためにはオオタカに関する十分な知識、調査等の経験が必要であり、また、多くの調査回数が必要であるなど、調査の主体である事業者等の負担が大きいことから、効果的かつ効率的な調査手法への改善が求められている。

### 2 調査方法

効果的かつ効率的な調査時期、調査時間帯、1回当たり調査日数、定点の決め方、データの記録方法等の検討を行った。また、オオタカへの発信器の装着により調査対象個体の行動を把握するラジオテレメトリー法による調査との比較検討を行った。

なお、ラジオテレメトリー調査は、定点調査と比べ、捕獲、発信器装着、追跡等について熟練技術が必要、捕獲及び発信器装着によるオオタカへの負担の増加等のデメリットがある。

### 3 結果

定点調査とラジオテレメトリー調査を同時に実施し、2つの調査方法の結果を比較したところ、定点調査では調査対象個体以外の個体を観察してしまうことがわかった。これは、オオタカを目視した場合に個体の識別が困難であること、繁殖期の前半には繁殖に参加しない個体が調査範囲内に生息していること等が原因であると思われた。

また、繁殖には求愛・造巢、抱卵、巢内育雛、巢外育雛などのステージがあるが、巢内育雛期に調査解析を行うことで、定点調査の結果をラジオテレメトリーの調査結果に近づけることができることがわかった。

以下は、定点調査の主な改善提案

① 繁殖ステージごとの生態特性に応じた調査

例) 求愛・造巢期：対象外個体が調査範囲内に生息

→営巣地の推定調査

巢内育雛期：雛への給餌、狩りの増加

→主要な餌場など行動圏内の構造把握調査

② 有効観察距離（500m程度）を考慮した定点配置

③ 調査第1日目のオオタカの行動を考慮して、第2日目の定点を移動・追加

④ 出現時間を秒単位に詳細に記載

⑤ 早朝の調査の実施

⑥ 写真やビデオ撮影による個体の特徴把握

⑦ ビデオによる巣の無人撮影（巣への出入りの確認）